

職能民の村と山上の遺跡から見つかった瓦器碗

同志社大学歴史資料館 学芸員

鋤柄 俊夫

1 茨木市石堂ヶ丘遺跡採集瓦器碗

石堂ヶ丘遺跡は、箕面市と豊能町の市町境に近い茨木市泉原の標高 650～680m を測る山頂に立地する。遺跡は弥生時代中期（第 Ⅰ 様式）に比定される高地性遺構であり、その立地は大阪平野が一望できる畿内でも最高所にあたる。資料は 1972 年度から 1975 年度にかけておこなわれた弥生系高地集落遺跡の研究による遺跡調査の際に採集された。

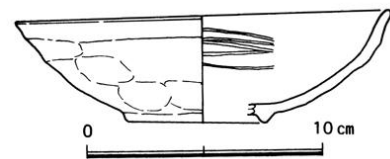
資料はいわゆる和泉型瓦器碗の範疇に含まれる製品で、やや重心の下がった球形の体部をもち、幅 6mm～1.5cm の幅で口縁部にナデが施され、その周縁に明瞭な稜線が形成されている。また口縁部はやや外反気味に仕上げられる。高台は断面三角形であり、外面の指押さえは単位が大きく粗い。風化による磨滅によってミガキの痕跡を全て表現できていないが、本来は密に施されていたものであろう。時期はおおよそ 13 世紀前半と考える。

さてこの資料の投げかける問題であるが、第一にはこの遺跡が一般の平地集落とは異なった農耕に不向きな場所に存在すること、第二にはこの資料が、風化により磨滅を受けながら一個体に復元された点を、あげることができる。

このうち第一の問題については、1968 年に桐原健氏が長野県内の山中から発見される平安時代の遺跡に注目して、農耕民と異なる生業によって、山中を漂泊していた山の民の存在とその社会的な役割について、整理している。その意味で網野善彦氏が指摘するような、農耕民以外の人々の存在をそこにあてることも可能かもしれない。



図 1: 瓦器碗採集地点位置図



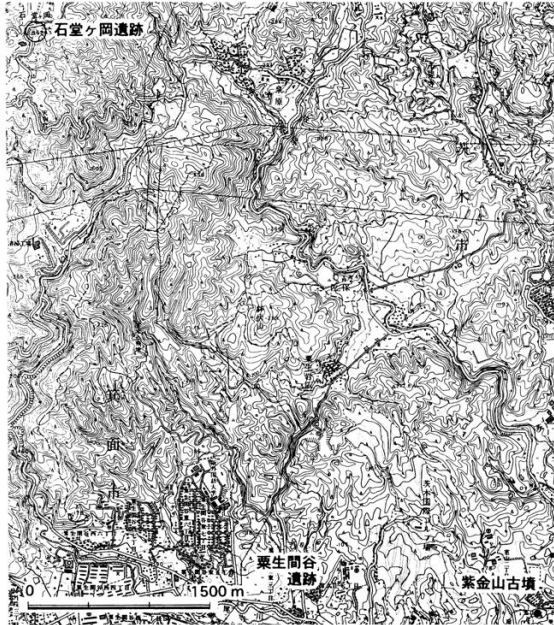
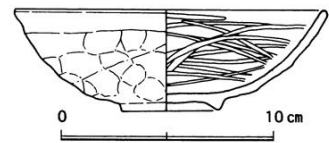


図 2: 石堂ヶ丘遺跡

しかしこの遺跡の場合忘れてはいけないのが、南西 3km に位置する勝尾寺の存在である。当寺は畿内でも有数の山岳宗教寺院であり、すでに元慶 4 年 (880) に清和天皇が畿内の山岳霊場を巡る際に訪れていることが『日本三代実録』の記事から知られている。したがってこの遺跡の性格を考える際には、当然この寺を含めた北摂の山岳信仰とのかかわりを無視することはできず、この瓦器碗の意味と機能についても、日常雑器以外の用途を考えておく必要がある。その点で山岳信仰関係の遺跡である福岡県太宰府市の宝満山では、山頂を中心として土器を用いた祭祀の行われていたことが知られており、それが本誌量における第二の問題に、重要な示唆を与えるものと考えている。

2 南河内郡美原町大保採集の瓦器碗

大阪府南河内郡美原町とその周辺の地域は、平安時代後期から南北朝期にかけて活躍した「河内鑄物師」の本貫地として知られている。これまでその研究は文献と金石文を中心に行われてきたが、この地域の発掘調査がすすむ中、鑄造に関わる遺構と遺物の発見が増加し、近年では考古学の方法によりその実態に近づく研究も行われてきている。



本資料の採集された美原町大保は、その中でも「大保千軒」と呼ばれるほどの賑やかさを誇った中世河内鑄物師の一拠点であったと伝えられ、村の西南端にあった烏丸大明神（鍋宮大明神）は、鑄物師が座を結成して納めたという、永久 3 年 (1071) 銘の縁起および由来書に拠っている。



図 3: 大保

本資料は、昭和 20 年に森 浩一氏が黒姫山古墳の周辺地域を踏査していた際に、同村の今池より採集したもので、瓦器碗以外に、多量の土釜片および平安時代末期の瓦も散布していたことが記録されている。和泉型瓦器碗の範疇に含まれるもので、緩やかに内彎して立ち上がる体部と、断面三角形の高台をもつ。外面には単位の小さい指押さえが密に見られ、また体部外面には重ね焼きのこん跡が斜めにはしる。時期はおよそ 13 世紀前半と考えられる。あるいは河内鑄物師の使った土器、といった言い方ができる資料かもしれない。

現在、中世の土器に対する非日常性と、農耕以外を生業とした人々の存在が注目されてきている。その点でこれらの資料は、共にその最も先端的研究に不可欠な要素であり、今後の詳細な検討により、この問題をより深化させる鍵を多く内包していると考えられる。

参考文献

- [1] 桐原健 1968 「平安期にみられる山地居住民の遺跡」『信濃』第 20 巻第 4 号
- [2] 茨木市役所 1969 『茨木市史』
- [3] 森浩一 1975 「三世紀の遺跡をめぐる」『別冊 週間読売』読売新聞社
- [4] 小野忠熙編 1979 『高地性集落跡の研究』(資料篇) 学生社
- [5] 鋤柄俊夫 1999 『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社